
不確定な世界で

どんぐり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不確定な世界で

【Zコード】

N4792R

【作者名】

どんぐり

【あらすじ】

取り立てて特徴もない、とある少女のお話。

「甘くて、切なくて、温かい。私は好きだよ、」いつこう話

私は端的に感想を述べた。

「うん。ありがとう。それで、何か気になる所とかあつたら言ってみて」

むしろそっちの方が重要だといわんばかりに、美咲が真剣な顔で迫つて来る。ちょっと怖い。

「そうだねえ……」

私は手もとの「ペー用紙に印刷された小説を簡単に読み直していく。

この小説は、いわゆる恋愛小説。過去のことで心にちょっとした傷を持つ少女が、中学一年生のときに転校してきた、とある男子生徒に恋をする。そして、その少年との交流の中で、少女はその傷を癒していく、一人の距離も縮まっていく。しかしあ互い告白はせず、そのまま別々の高校へ。その後も様々なイベントがあつて、最終的に二人は結ばれる。そんな物語。

それはとても甘くって、ちょっと切なくて、本当に温かい。でも。

「……なんだか上手く行き過ぎてる気がする。都合が良すぎるのは言つか……物語の進行のために、上手い具合に設定を考えただけっていうか……。ああ、そうだ、恋愛ものっていうより、ミステリーを読んでる気分になるんだよね。最初の伏線がこうなつて、そのあとどこに繋がつて、とか。ミステリーの解答編を読んでるみたい」

その後も、私はなんだかんだと感想を述べていく。

少女の気持ちが書けてないだの、もしくは書き過ぎていて鬱陶しいだの、男の子の態度が乙女の妄想になつてるとか。……

言い終えて顔を上げると、頃垂れて落ち込んでいる美咲の姿を発見した。

あ、またやつちやつた……。

後悔しても始まらない。私は手元の「ペー用紙を丁寧にまとめて座卓の上に置き、美咲を励ましにかかる。

「あ、でもさ、ほんといい話だと思うよ。ほわほわしてて、きゅんとして、ふわふわで、ほわわーん、つしてて」

身振り手振りでその甘さや温かさとかを表現していると、美咲は幽鬼の様にのつそりと顔をあげた。

「……それ、まったく意味わかんない」

「うつ……ごめん」

「……いいけど。まあ、とにかく感想、ありがとう……」

美咲はそれだけ言い終えると、力なくへなへなという動きで机に突つ伏してしまった。いつなると、美咲は一時間くらいはへこみつぱなしだ。

「あ、えつと……」

「……いいの。気にしないで。そのうち復活するから、平氣……」
全然平氣ではないけれど、いつもた美咲のへこみっぷりはいつものことなので、私は一回氣持ちを切り替える。
息を深く吸つて、大きく吐く。いわゆる、深呼吸。

「あ、お菓子持つてくるね」

「はあい……」

ひらひらと手を振る美咲。よかつた。ちゃんと生きている。
私は立ち上がり、自室を出てキッチンへと向かう。お菓子なら、そこにはいろんなものが置いてある。

「ふう。お菓子、何があるかな……」

美咲は恋愛小説を書いている。プロを自指している、と明確には断言しないけれど、なれたらいいよね、なんてことを言つていて。そんな風にはぐらかしているけれど、実際にはかなり本氣だということは、田頃の美咲の態度からはつきりしていた。

そして、今日はその小説の一つを見せに来たのだ。私に感想を貢うために。

「……でも、私が感想言つと、美咲、へこんじゃうんだよねえ」
そのことに、少なからず罪悪感を抱いてしまう。私は悪いところばかりに目が行く性質で、その部分を指摘してばかりいる。なので、美咲にしてみれば、私の感想を聞くと自分の作品がとんでもなくつまらないものに見えてしまうのだとか。

「そんなことないんだけどなあ……」

冷蔵庫に入れてあつたシュークリーミーを取り出しながら、小さな声で呟いた。

つまらないことはない。むしろ面白いのだ。全然完璧なんかじやなくて、まだまだ未完成だというだけ。

美咲を傷つけてしまうのは心苦しいけれど、かといってうわべだけの称賛は逆効果だし、美咲自身も望んでいない。そんなのは迷惑だと、半端な称賛を述べた時には真剣に怒られた。

「ま、でも、これからだよね……」

美咲はこれから伸びていくんだね。一作ごとに、私の指摘する欠点は減っていく。もちろん、何度も同じことを繰り返し指摘することだつてあるけれど。

「……楽しみだな」

私は微笑んで、自室の扉を開いた。

「はあ」

思わず出た溜息が恥ずかしくて、私はちよつとだけ頬を赤らめてしまった。

なにやつてんだろ……。

私は気を取り直して、視線を黒板に向かた。数学の先生が、私は到底興味を持てない数式を書いていく。

だんだん退屈になつてきて、私はまた左斜め前の席に座る牧村君に視線を移した。成績はどちらかと言えば良い方で、スポーツが一般的に得意な牧村君。性格は意外と温和で、ルックスもいい。女子にはちよつとした人氣者。

そんな牧村君は私の視線なんて全く気付かず、熱心に授業を聞いている。よく聞いていられるな、と感心し、牧村君は数学が得意だという話を思い出した。

好きな人を眺めてぼんやりするといつ、乙女過ぎる行動をとりつつ、私は思う。

いいなあ計算式は、決まった法則で計算をしていけば、ちゃんと正解に行きつくんだから。今の私は、どんなことをすればいいのかも分からぬ。正解にたどり着くなんて、想像もできない。こんなことを思つてもしようがないことはわかつてゐる。数学と恋愛を比べたつて意味がない。

「はあ……」

また溜息を吐いた。少しばかり音が大きかったらしく、牧村君がちょっとだけ反応して、でも振り向きはしなかつた。よかつたような、悲しいような……。いや、これはよかつたんだ。だつて、こんなことでみつともなく赤面している私の顔なんて見られたくはない。

「琴音、授業中の溜息多すぎ」

放課後、人気のない通りを歩いているときに美咲が言つた。初冬の空気が、私の熱くなつた体を気持ちよく冷やしてくれる。

「……聞こえてた？」

「聞こえるつていうか、ちょっと意識してればわかる。席なんてほんの机三つ分程度しか離れてないんだからさ。なんか暗いわあ

「ぐ、暗いかな、私」

「うん。暗い。もつと明るく振る舞つた方が断然いいよ。恋する乙女なんだから、もっとふわふわほわわーん、つてしてればいいの」先日私がしたように、美咲が身振り手振りを交えて美咲が話す。自分がしていたであろうその動きに、今更ながら恥ずかしくなつてきた。さつきとは別の意味で、体が熱を持つてしまった。

「はあ、琴音つてホント恥ずかしがり屋。何を思い出したか知らないけど、すぐ赤くなるし。そんなんだから告白もまともにできな

いんだよ

「こ、告白ひて……」

「なに？ 牧村君に告白しないの？」

何のためらいもなくそんな話題を持ち出す美咲。そんな話題をいきなり出すなんて、と思つているのは、私の恋愛経験が少なすぎるからだろつか？

「告白はするかもしないけど、それはまた今度……」

「はあ。なんでこいつこうときには全然はつきりしないのかなあ。小説の感想を言つてる時みたいに、もつとはさきはしゃべればいいのに」

そんな無茶な。

「告白するのと感想を述べるのは別物だよ……」

だいたい、感想を述べると同じ勢いで告白するなんて何の魅力もない。恋愛小説を書いているくせに、夢のない話だ。

「そうかなあ？……まあ、それもそつか。淡々と無表情に愛を語る少女。それはそれで需要ありそうだけど、現実的じやないねえ」「つていうか、私のことより、美咲は自分のこと考えてみたら？

好きな人くらい、本当はいるんでしょう？」

一瞬きょとんとした顔をして、その後すぐ美咲が苦笑する。

「いや、あたしには好きな人はいないよ。中学の時はいたけど、今はいない」

達観したように語る美咲の姿に、どこか違和感を覚えた。ほとんどあてずっぽうだけれど、私はある予想を口にした。

「……なんだずつとその人が好きだつてことか」

ぎくり、と言う感じで美咲が身体を硬直させ、頬を桜色に染めた。

「……つぬせーな。どうしてこんなときだけ鋭いんだか」「さあねえ」

それは私にもよくわからない。なんとなく、美咲の書く小説の内容や性格からといってそんな気がしたのだ。

「ねえ、琴音はさ、一回ぐらご告白してみたりひとつ？ その恋愛に

対して臆病な性格、少しは変わるかもしねりないよ

「……いいよ。変わらなくて」

はああ、と深い溜息をつく美咲。

「そんな琴音、つまんない。牧村の奴、あたしの琴音をこんな骨抜きにしおつて。許すまじ」

「あたしの琴音、つてねえ。私は美咲の彼女じゃないんだから」「わかつてゐるよ。つてか、あたしの考えでは、たとえ恋人同士だ

うううと、誰かを所有物みたいに扱うのは最低」

「ま、それもそうだよね。良くも悪くも、人は誰かのモノにはならないよ」

こんなことを言いつつも、牧村君に「琴音は俺の女だ」とか言ってもらえたならちょっと嬉しいかもしれないと思つた。もちろん、本当に所有物扱いされてはかなわないけれど。

「あのさ、やつぱり琴音、一度告白してみなよ」

例によつて、私の家に新作を見せにきた美咲。私に新作を見せる前に、美咲は開口一番そう言つた。

「……なんで？」

「だつてさ、今の琴音、全然カツコよくない

「私、女の子なんだけど? カツコよくないってどうこうこと?」

「だつて、昔の琴音はもつとカツコよかつた。もつとはつきりしてて、うじうじ悩んでばかりじゃなかつた」

座卓を挟んで、美咲が正面から真撃な眼差しを向けて来る。そのまま瞳に、私は少したじろいでしまつた。

「……誰だつて悩むでしょ?」

「そりやね。わかつてゐるよ、そんなこと。でもさ、今の琴音は見るに堪えない」

「……私つてそんなにひどい状態?」

「うん、と大きく頷く美咲。ちょっとショックだ。

「……そつかなあ」

「だつてさ、琴音、最近授業なんて全然聞いてないでしょ？牧村君の方ばかり向いてる。そんで溜息ばかりついてる。私と話してもどこか上の空だし、登下校中に歩いてるときだつてぼんやりしてるし。この前なんか、踏切が上がった後に十秒くらいはぼーっと突つ立つてたでしょ？」

「な、なんでそんなことまで知つてんのっー？」

まさか、美咲にまで見られていたなんて。羞恥心で顔が赤くなるのが、見えていなくてもわかつた。

「偶然見かけたの。いい加減、覚悟決めたら？告白してみれば、ちょっとは落ち着くんじゃないの？」

「……だからって、そんな簡単に実行できる」とじやない「はああ、とまたふかあい溜息。

「なんだかあたしまで溜息増えてきた。まあね、琴音の気持ちもわかるよ。告白って、他の分野にない勇氣いるもん。ま、あたしが何言つたって、最後に決めるのは琴音だよね。任せると」

頬杖をついて、美咲があきれ顔で見つめて来る。その視線を受け止めるのがつらくて視線をはずすと、床に置かれた鞄に入った数学の教科書が見えた。

「……数学の世界が羨ましいな」

「んー？なんで？」

「だつて、数式は機械的に解けるんじゃない？きつちりやれば正解に辿りつくし」

私のぼやきに、美咲は思案顔。

「んー？まあ、そういうならそうかもだけど、それってすうじくつまらないよ？」

「……どうして？そのほうがずっと楽でしょ？今みたいに悩むよりさ」

「楽と言えば楽かもね。でも、数学つてどつあがいたつて正解にしか辿りつかないでしょ？そんな人生つまんない。ひたすら正解の選択肢だけ選んでいつて、わかりきつた正解の終点にたどり着く、

なんてね。そもそも、人生に正解なんてないよ。ついでにいえば、間違いだつてないはず。どんなことも、どこか正解でどこか間違いだよ」

美咲はどうでもいいという風に呴いているけれど、さつと真剣に言つている。ちょっとした真面目な話をするときには、いつもこうやって不真面目ぶるのだ。

美咲から視線をはずし、私は考える。

例えば、人生において私がすることが全て決められていて、正解にしか辿りつかないとするならどうだろ？ 成功が保証されているけれど、それ以外のことは存在しない。失敗はない代わりに、きっとそこには達成感もない。だって、そうなることは初めからわかっているのだから。

そして、出会うべき人は必ず見つかって、その人と当たり前の様に結ばれる。そこには、今の私の様な不安や悩みはないけれど、わからない未来を思うことから来るドキドキなんてものもない。これは恋愛と呼べるのだろうか？ 少なくとも、私はそれを恋愛とは呼ばない。

うん。こんな人生は、確かに嫌だ。

「……さすが小説家さん。考えることがどこか達観してる」

「何それ？ あたしの思考回路がおばあちゃん化してるとて言いたいの？」

「いや、そうじゃなくて、本当にいいこと考えてるな、て思つてれ」

「ふーん。ま、どっちでもいいけどね。とにかく、今はこれ、お願いします」

差し出された紙束を受け取つて、私はそれに目を通していく。ここに記されるのは、美咲の想い描く、正解も間違いもない人生だ。

それはとても面倒で、苦しくて、でも、だからこそ面白くて、喜びに満ちている。

ありがとうございました。

そんな日々が続くだけで、きっと私の高校生活にはたいした変化は起きない。そう思っていたけれど、何かが変わることは訪れるものらしい。私が学校帰りに近所の古本屋を覗いた時に、事件は起きた。

「え？」

「お？」

田を丸ぐする私に、特になんの変化も見せない、無表情の牧村君。

「……どうしてこんなとこに？」

「いんなどこって、ただの古本屋だろ？俺だって古本屋くらい来るわ」

何をそんなことを、と呆れられてしまった。それはそうだ。牧村君が古本屋に来ることに、何もおかしなことなんてありはないのだから。

「ふーん。八尋さんも少年漫画とか読むんだ。あ、少女漫画もある。なんか女子っぽい」

私の手元を覗いて、牧村君が言う。なんだか妙に恥ずかしくて、とつたにタイトルなど見えない位置に持っていく。そんな私に、牧村君は苦笑い。

「別に隠さなくていいじゃないか。俺に見れるのって、そんなに不愉快だった？」

いや、そうじゃなくて、と言おうとして、でも緊張して声が出なかつた。結果、私は不機嫌そうな面持ちで、無意味に牧村君を睨みつける形になってしまった。

私の視線に、どこか怯んだ様子の牧村君。

「……え、マジで？ そつか。いや、悪かった。別に誰かに言いつとかしないから安心して。じゃね」

そう言って、店内に入つて来たばかりの牧村君は、ひらひらと手

を振つて帰つていぐ。

なんでこうなるの?。

自分で自分が嫌になる。牧村君は早とちりし過ぎだけれど、それを招くような行動をしてしまったのは私だ。

「ちょ、待つてっ」

叫ぼうとするけれど、どうにも声が出なくて、リストの囁き声くらいになってしまった。

もう少。

自動ドアを出て、牧村君は行つてしまつ。それを追いかけて、私も歩き始めた。牧村君なんて説明するかなんて知らないけれど、ともかくもこのまま帰してはいけない。それだけが頭にあって、私は店の外に出ようとして、

「ちょっと、待つてください」

「へ?」

まだ若く、どことなく陰湿そつな雰囲気を持つ男性店員から声を掛けられてしまった。店員の視線の先は、私の手の中にある四冊の「ミニックス。

「あ……」

万引きと思われてる?

「失礼ですが、こちらへ」

店員が、店の倉庫だか準備室だかにつながるだろうドアの方へ促す。

「あ、いや、あの……」

しどろもどろに言つ私に、店員は傲然とした態度をとる。

「お客様の迷惑になりますので、お静かに。こちらへ」

店員が手を伸ばす。腕を掴まれそうになつて、でも私が掴まれたのは、店員が手を伸ばしていた右腕ではなく、左腕だった。そして、急に後ろに引っ張られた。

「え?」

振り向く間もなくそのまま、今私の腕を引っ張つた誰かの体にも

たれかかる形になる。

「行くぞ」

牧村君？

その声に一瞬びくりとして、でも硬直している間もなく引つ張られた。その時の衝撃で、手に持っていた本をぱりぱりと床に落としてしまった。申し訳ない。

拾う時間なんて全くなく、背後から「待ちなさい」という怒号にも似た叫びを聞きつつ、私と牧村君はとにかくその場から逃走した。……これでよかつたんだろうか？

「……はあ、はあ……まあ、ここまでくれば平氣だ」

軽く息を弾ませているだけの牧村君に対し、私はもうへろへろで、且ついたベンチにすとんと腰を下ろし、力なくうなだれる。心臓が壊れた様にばくばくと鼓動しているのが、耳障りな程に感じられた。

「…………ま、まきむら……くん……はや……すぎ……」

呼吸を整えつつ、私は不条理にも非難の声を浴びせた。牧村君は私を助けてくれたと言つのに。

「ああ、悪い。でも急がないと掴まつてたしな」

牧村君が、へたり込む私の横に腰を下ろした。そのことに一瞬だけドキリとして、でもそれ以降、私はそのことに注意を払う余裕はなかつた。

「……あ、なんていうか、ほんときつそうだな。悪い。えっと……なんかジュークでも飲むか？」

私の返事も聞かず、牧村君が三十メートル程前方に見えていた自販機向かって走つていつてしまつた。そんなに気を使わなくていいのに。

しばらくの後、私もだんだん落ち着いてきた。自分の状況を把握するだけの余裕が生まれたので、私は周囲を見回す。わけもわからず走つて来てしまつたが、ここはある公園らしい。団地の中の、

幼児向けのちゅうちゅな公園だ。初めて来た場所なので、「」がどこなのかなはよくわからない。

順に左から見回していくと、小さな砂場、滑り台、ブランコがあつて、最後に、右隣に牧村君が座っていた。

「あ……」

今更ながら、隣に牧村君がいることに気づいて心臓が不自然な収縮をしてみせた。

「ん？俺がどうかした？」

「い、いや、なんでもないから、うん、なんでもないの」じたばたと手を振つて、私はなんでもないという風に努める。自分でも、これでは全く「なんでもない」の意味にはならないと思うけれど。顔を真っ赤にしているのはわかっているのだけれど。

「はあ……。とにかく、これ、せっかく買つてきたから飲んでよ」牧村君が差し出す、温かいブラックコーヒーを私は受け取つた。

……温かいブラックコーヒー？

外の空気が若干肌寒いからと言つて、今の状況では、温かい、しかもブラックのコーヒーはないだろ？

「……なんでこんなときに温かいブラックコーヒーなの？」

不覚にも、自分の声が剝きになつていた。こんな恐ろしげな声で好きな人に語りかけるなんて、最悪だ。

「あ、やっぱりダメ？間違えて押しかやつたんだけど、もしかしたらハ尋さん飲んでくれないかな、なんて淡い期待があつたんだけど……」

「」は飲んでおくべきだろ？あなたの優しさがうれしいです、と朗らかに笑つて言うべきだろ？か？

ちょっと迷つて、でも私はすぐに決断した。

「……「」めん、」れいらない」

コーヒーの缶を、私と牧村君の間に置いた。牧村君は苦笑い。

「……いや、俺の方が悪い。」めん。うーん、じゃ、これ。飲みかけだけど、飲む？」

再び差し出されたのは、飲みかけのスポーツドリンク。特に好きでも嫌いでもないし、今の私はそれを飲みたいと思っている。けれど、私にはそれを手に取る勇気はなかった。

「いや、いいよ。後で自分で買うからわ……」

「そつか。それならそうしてくれ。ま、とにかく危機は去ったし、俺は帰るかな」

缶コーヒーを手にとつて牧村君が立ち上がり、私を置いてそのまま去ろうとする。私は慌てて呼びとめた。

「いや、ちょっと」

「うん? まだなんかあつたっけ?」

振り向く牧村君。

「いや、なにかつて言つか……えっと、私、ここがどこだか知らないから、送つていってくれない?」

一瞬キヨトンとして、ああ、わかった、と頷いた。

並んで歩く二人。思わず幸運に喜びながらも、私は何が何やらわからない気分だった。

「……そういうば、私、もうあの古本屋に行けなくなつた。素直に捕まつてちゃんと話した方が良かつたんじやない?」

話題に困つて、私はそんなしようもないことを言い出した。

「いや、あの店員には変な噂があるからな。逃げといた方が正解」聞き捨てならない言葉を聞いて、私は眉間にしわが寄つた。

「……変な噂つて?」

「万引き犯を必要以上に問いつめる变态さん。本当に無実な人がその無実を主張したつて、変な理屈をこねてなかなか帰してくれないんだつてさ」

あの店にはそんな人がいたのか。……別な意味でも、もうあの古本屋には行けなくなつてしまつた。

「……ありがとう」

ぱつりと呟いて、

「どういたしまして」

「ぶつきらぼうこ返された。

結局会話は続かず、そのまま黙々と歩くこと十分程。

「あ、ここならもう分かるだろ？駅ももう見えてる
俯けていた顔を上げると、ここは見慣れた通りで、いつも利用し
ている駅が前方にそびえ立っている。

「じゃ、俺はこれで」

今度こそ手を振つて離れていく牧村君。

「あ……」

小さく呟く私。その声が聞こえたのか、牧村君が振りかえった。
何？と目で訴えて来る。

「あ、えつとさ……」

硬直。その後の言葉が続かない。焦る私。頭の中は大暴走。

「あの、」

「あのさ、一つ聞いていい？」

「はい！？」

先を越されてびっくりしてしまった。

「こんなところで直接聞くのもなんだけど、俺つてハ尋さんに嫌わ
れるようなことしちゃつたつけ？」

嫌う？私が、牧村君を？何故？

「……何の話？」

視線を外して、牧村君は気まずそうに言う。

「だつて、さつき俺に会つたときになんか嫌そうだったし。知ら
ないうちに嫌われるんじゃないかと思つて。もしそうなら直すけど
そういうえば、あの古本屋で私は緊張して牧村君を睨んでしまつた
のだけ。

「いや、そんなことないよ。あれはそんなことじやないかい？」

「そつか。ならないや。よかつた」

誤解が解けてほつとしたのも束の間、またも牧村君は去ろうとす
る。それもまたも食い止める私。とつさに、今度は牧村君の手を掴

んでしまった。

「……えつと、なに?」

それは私が聞きたい。私は何がしたかったのだろう?「」で告白でもしようというのだろうか?いや、まさかそんなことまで出来るはずがない。なんたつて私なのだから。

考えていてみじめになるが、ともかくも私は牧村君の手を握りで

静止中。

「……?」

マネキンの様に固まって、視線だけはどうにも定まらない私。いたたまれなくなつて、よく回らない頭をそれでも無理やりからからと回し、私は口走る。

「あ、あの、い、一緒に、か、か、帰らない?」

言い切つて、私は顔を俯け、紅潮し過ぎた顔を髪で隠す。牧村君の戸惑う気配が、見なくて伝わってきた。

痛々しい沈黙が流れること十秒か、二十秒か。いや、でもそんなに時間は経つてないはずだけど、よくわからない。

「あ、えつと……ごめん。俺、今日忙しいんだ……。じゃ」

牧村君が、私から逃げるように駆けていく。私はその後ろ姿を呆然と見やる。

……ふられちゃつた。

直接「好き」だなんて言わなかつたけれど、今のは「好き」と言ったのと同じことだらう。それを断られたのなら、これはきっと失恋だ。今まで散々のんびり歩いて来て、実は本当に忙しい、なんてことはないだらう。

そのことにどこか悲しみを感じて、どこか安堵している自分を見つけた。失恋で安堵するなんて、変な話だ。とにかく、失恋だとうのに涙も出なかつた。

立ち尽くしながら、私はふと思つた。これは私にとって正しい行動だったのだろうか?なんてことを。

きっと、駅に着いた時点ですぐに別れてしまつ、なんてことは間

違ひだ。誤解を残したままになつてしまつていたから。それはものすごく後悔する。

「……今さつき、何も言わずに別れる、なんてことをしていたら私はどう思つたのだろう? そうすれば、私はふられることはなくて、まだ牧村君を好きでいられた。でもその代わり、希望のない気持ちを抱えたままだ。それに、何も言えなかつた自分が嫌になつただろう。」

『どんなことも、どこか正解でどこか間違いだよ』

そんな、美咲の言葉を思い出した。確かに、正解なんてないのだ

るべ。

「……帰る」

私は考えるのを止め、沈痛の面持ちで駅に向かつて歩き出した。

「へえへえ、琴音もそんなことが出来るんだねえ。感心感心」
美咲がにまにまといやらしい笑みを浮かべて、私の精一杯の告白シーンを嘲笑う。なんか腹立つなあ。

「ま、これには私も驚いてるけどね。よくあんなこと言えたな、なんて。でも、おかげですつきりしたかも。たしかに、「恋愛に対して臆病な性格」は少しは変わつたかもね」

前よりずつと落ち着いた自分を鑑みて、私はそう思つた。
が。

「……何、そこにやけ面」

「いや、本当にそうかな? なんて思つても。だって、今の琴音って、ただ牧村君に脈なしとわかつて、諦めてるだけじゃない?」

「そうだろうか? 言われて、私は想像を巡らせる。

例えばもし、牧村君の他に誰か好きな人がいたなら、私はどうしているだろう? その人のことを想つて、またどこかおかしくなるだろつか?

「……なるかもしれない。少なくとも、ならないとは言い切れない。

「……そもそもしないけど、それがどうかしたの?」

ふふん、と上から目線を感じる笑み。

「あたし、恋愛小説を書きながら思つ」とがあるんだ

「何を？」

「うん。あのね。恋愛小説の定石の一いつに、男女が付き合い始めたまでを書く、つてのがあるんだよね。わかるでしょ？」

「うん。まあね」

例えば、とある少女が、ずっと片思いしていた相手とひょんなことからちょっとだけ親しくなつて、それからいろいろなハプニングに見舞われる。その中で、一人が少しずつ接近していく。定石と言えば定石か。恋愛ものの王道とも言つのかもしれない。

「そういうのって、男女が付き合い始めたらほぼお終いなんだよ。付き合い始めるまでが一番の山場だからさ。付き合い始めて、その先はなし。

でも、現実はそうじやない。付き合い始めた後も、現実はずっと続していく。付き合ひ前より、付き合ひた後の方が断然苦しいことだつてあるよね」

わかるでしょ？と目で訴えて来る。そうだね、と私は頷く。

「ならさ、逆に言つなら、たとえふられたつて、それで諦めることはないじやない？最初はダメでもさ、小説の限られたスペースなんかじや全然語りつくせないよつな、いろいろな出来事の中で、相手の気持ちも変わつていいくかもしけない。だから、琴音もあきらめるには早いよ。そうでしょ？」

たしかに現実は小説ではなくて、自分を主人公とした物語が死ぬまでずっと続いている。その中には、いいことも悪いことも、きっと同じくらいいたくさんある。

そして、私たちの人生は、決して書き記すことなんてできないくらいの、たくさん出来事で満ちている。それならば、そのうちのどこかで、一度はふられた相手の心が自分の方に向くことだつてあります……のかな？

「……そうかもね」

「でしょ？だから、琴音もむづちょいがんばんなつて。……ん？」
美咲が私の異変に気付いたらしく。

「ふつ。あつはつは」

「もうつ、笑わなくてもいいでしょ？」

「いや、だつてさ、あたしがちょっと諭しただけで、むづ顔赤くしてんだもん。やっぱりなんにも変つてないね。あーあ、恋愛に関しては奥手のままかあ」

からからと笑う美咲。ちょっと苛立つて、でもすぐそんものは消えてしまつた。そんなことより、牧村君のことが気がかりだつた。

まだあきらめるのは早い。せつだとして、私に何が出来るだろ？美咲の言う通り、私はまだ奥手で、臆病だ。物語にありがちな、「お弁当を作つていく」なんて芸当はできそうにない。

「……なあに真剣な顔して悩んでんの。もつと気樂にいきなさいつて。もつ、相手に気持ちは伝わつてるようなもんなんでしょう？」うなつたら、半端に遠慮しないでどんどん攻めてけばいいのよ」妙に明るく私を諭す美咲。でも、こうこうときは大抵いい加減な思いつきを言つているだけだ。

「……その理論つて、ほんとに当てになるの？」

「おやおや、恋愛小説を書く女の言葉が信用できないの？」

「……つていうか、そこにやけ面が信用できない」

おやまあ、と呴いて、美咲は急に表情を引き締めた。……頬がぴくぴくと痙攣しているけれども。

「楽しんでるだけじゃん。こつちは真剣なのに」

私がふいつと視線を逸らすと、美咲が本当に笑みを消して困り顔。

「いや、「じめん。楽しんでるだけじゃないんだつて。あたしも真剣に考へるからやつ怒らないでつて」

……ということは、今までやはつぱり真剣じゃなかつた、と。

怒る氣力もうせて、私は改めて美咲に向き直る。

「もう。じや、この厳しい現実を生き抜くために、緊急の作戦会

議でも始めよっか」

おどけて言う私に、美咲が笑顔を見せる。

私の人生は続していく。小説の様に、都合よく進んだり、いい所でタイミング良く終わったりしない。

それはとても苦しいことだけれど、希望だつて溢れている。

そういえば、中学生からの美咲の片思いもまだ続いているのだつけ？美咲は口だけじゃなく、自分自身も簡単にはあきらめていないと語つことか。

……そうだね。うん。あきらめるには、まだ早すぎる。

不確定の未来を思うと、自然と笑みが浮かび、心臓が心地よく高鳴り始めた。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4792r/>

不確定な世界で

2011年10月8日19時14分発行